

木下奎太郎宛
知友書簡集
上卷

岩
波
書
店

木下李太郎宛知友書簡集 上巻

一九八四年七月九日 発行 ©

定価 三七〇〇円

編 者 岩波書店編集部

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目十五番一
発行所 緑 川 波 書 店

電話 〇三・二五五・四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・三秀舎 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

木下杢太郎宛知友書簡集

上卷

目次

明治三十三年(獨協中學時代)	一
明治三十四年	四
明治三十五年	一〇
明治三十六年(一高時代)	一五
明治三十七年	一七
明治三十八年	二九
明治三十九年(醫學生時代)	六
明治四十年	六
明治四十一年	七
明治四十二年	一〇
明治四十三年	一五
明治四十四年	二三

明治四十五年・大正元年（醫局時代）	二六
大正二年	一四
大正三年	一五
大正四年	一六
大正五年（南滿醫學堂時代）	一八
大正六年	二六
大正七年	二六
大正八年	二九
大正九年	三〇
大正十年（歐米留學時代）	三〇
大正十一年	三九
發信者名索引	三五
後記	三九

明治三十三年

1 石津寛 (封筒缺)

(九月四日)

前文例ニよりて御免じや／＼定めし君も僕の様ニピン／＼して居ることだろうと思ふ

吾々の最愛だッた暑中休暇も早敷日を出ぬ中ニ其局をつぐるゝことか、やれ／＼早いことじやて

昨日は蓮が咲いて螢がとんで居たに今日は早蟲がなく時節とはなつたネ 見たまはすや中元の月明かなる夜半白露既に葉末ニ宿りて袂に涼しき初秋の風にあたりで蟲々が唧々なく折などはいや老婆じやないが物思がするわ

いやだ／＼これから天が澄んで月は高くなる雁は音れて桐の葉がちる／＼木の葉が黄ばんで柿の實が一つ二つ枯枝ニ留る、木枯の風が綿入をさしとほすなどいふ様ニなることを今から思ひ出すとためいきが出て来る。思へば世の中なんて大方こんなものだろうよ！ それだから僕はいやだ 即ち溪流のことさ、初はすてきな馬力で月二二回なんていふ説まで吹き出した人間さへニ冷ゆるや恰も氷のごと、僕は實は投稿者輩の様子を試したのである、決して自分がいやで勝手にこれまで延期したのも何でもないのである。僕は既ニ六ツばかり原稿が出来て居るのだ八月中旬までニ、

いやだ／＼しみ／＼いやだ こんなニ冷えるなら初めッからやらぬ方が加はらぬ方がよかつたに

明治 33 年(1900)

後略するツ 頓首

九月四日

正雄君 案下

寛

明治三十四年

2 石津寛

伊豆伊東村 太田正雄様

三月廿八日 千葉縣海上郡銚子町 石津寛拜

謹呈。

其后は如何御起居なされいや 定めし毎日く海邊ニ其詩的なる景色を貴兄の多感なる腦髓を以て觀察有之い
事と存居い

小生歸省后いそがしくてくたまらず——いやそう忙はしくも無之けれどたゞなんだかいそがしいので——や
つぱりいそがしいのだネ

そして君の手紙のついた時は其多忙の時でありい。

此頃當地頗る暖かニい

昨今やつと桃は咲きい

歸宅后五日ばかり家の水で顔を洗つた后曉鷄館——ソラ昨年六月だつた歸省して、ネー防さまオツトこれはしく
じりい——へ参り遊び居い。學生の身としてあまり氣取るとは申し玉ふなかれ。自然を樂むもの。自然の妙趣
を味ふ者ニは限りなる大海の眺ニ如くは無之い。など申すと大分詩人めき文文めきいへ共お門達ニい
それからそこニは恰も高等學校の文科の三年だといふ人が居りいて大なる愉快極りなき談話散步を共ニ致い

案外ニ話せる人なりき。これも同じく試験休暇で。

今では歸宅致居ゆ。ころんだりねたり致居ゆ。小生の小學校朋友は大概は四散してしまつた。今だに親しく交つて居る友は僅ニ二人ぎりニゆ

鐵砲の好伴侶。でもないが小生の愛犬(六圓。たからつてふざけては困るぜ)「ベキ」は小生在京中ころされゆ、實ニかなしくてたまらず家の者は「もう犬は飼はない方がいい」つて云つて居る故ほんとニ困りゆ

來る二日から築波(ツキナミ)の方から水戸、それより鹿嶋の方へ旅行致すつもりニゆ。四日位はかゝるつもり、同志の者ハ三人いづれも小生の小學校朋友——前ニ記しし二人ニゆ。一人ハ當地の中學校で、他一人はフラく者ニゆ。なかく盛んな人達で。やがて面白いことはあとから報知しよう。

試験の成績貴君は七番の由、何せ目出度ゆ。

それから可愛想なのは長田子ニゆ。ほんとニあはれでね小生泣き申ゆよ、何だつてあの君がほんとニくあはれつぽい手紙を長々と書いてよこした故、小生ほんとニく返事が書けなくて——實際カウジ身体カウジの置所が無之ゆひし

彼は泣きニ泣いた眼を拭ふて徐ニ歌ふらく

とても世の春を味ふ我ならじ靜に秋の月ニ泣かずや

心緒ハ亂レテ調ふニ由なくなげきに嘆きし果の此歌、君よ、太田君——歌はきらいと嘗ては云ひし太田君、小生よりのお願だから一度は其歌を味つてやつて呉れたまへ。可愛相な子ですよほんとニ。

此手紙が彼から來た以來さつぱり梨の礫の音沙汰なしなるは如何なるわけニや。彼は其書狀のうちニ「君は晝小生の子、われは夜の子、其けじめわかち難く再び逢はんことかたし。」云々と云はれた所を見るともう吾等ニ合

はす顔がないといふのかしらん。そんな事云はれると一層あはれさがましてくる、それから「もう溪流と別れねばならず云々」悲哀の結果嘆嗟の極大ニ決する所が有之し者と見え、君のとこへは何と申ひや、君ほんとニ可愛相にては無之ひや、小生實際二度泣き。思ひしひては。

昨日(二十七日)近所の池へ鮒つりニ行きて池の中へおつこちひ。衣ものビシヨぬれニなり大ニ寒い目ニあいひ。意氣地のない奴と定めし御笑ひなさることゝ存ひ。而し笑つて下されは澤山ニひ

毎日く鐵砲ト釣(但シ鮒)と投網(但シ日ニ一匹カニ匹位)とが商賣ニひ

桃の花を封じひ、此桃は小生が小さい時二種を植ゑて置いたのが大きくなつて今年初めて花を咲きしニひへば惜しい事乍ら封じひ。あとニは四つ残り居ひが皆蓄にて花は一つしか咲いて居らず

今日ハ銚子中學の開校式にて文部大臣やら縣知事やらが來たので大さわぎニひ。國旗を立てるやら樂隊が來るやら――。明星を中傷シタ奴だと思ふと末松の野郎奴惡くゝてたまらず、招待狀引きやぶつて特別入場券人ニやつたも少しばかりの氣ばらしニひ

此度の明星の形つたらいや早ねうちなしニひ。成美(君ノコトニテハナイゼ)が去つてからは殆どだめの貞ニひ。表紙ニハ大キナく女ノカホガ画イテアツてソシテ内容モキタナイシ。鐵幹曰はく「明星は二十四號を重ぬるまでは廢刊せず云々」大分よわい音を吹いて來た様ニひ。八號九號十號あたりの意氣も大分なくなりひ様なり。此頃小生またく變な心が起りて困りひ。變な心ツてたゞあはれつぽくなりひ事なり。長田子のことからなので。

折々ハフラく利根岸ニ出テ二時間位アルコトヲ思つて居ることが間々ありひ。何故か人間ははかない様な心地ニしてたまらずひ。まだ口ニは云へぬなれど。此度の旅行も實はそれを忘れるための方便と思召被下度ひ。

また申ましよう左様なら

三月二十八日

寛

正雄様

3 長田秀雄

伊豆伊東湯川にて 太田正雄君 平信
(消印七月二十一日) 沼津千本濱にて長谷寺内 長田秀雄

七月も早や半に相成り申す 某のかりずまい沼津の海濱にて太き古き磯馴松の間にある觀世音堂にては 堂守は尼にては 某等四人大に閑暇に 日々五月雨のふりては故かし本を讀み居は 鏡花の照葉狂言おもしろくは 某等目炊の興味及び苦しき初めて悟り申す 魚は新らしくは 今日 はめづらしき日本晴にては 石津君より御消息有はす也 云ひたき事頗る多くはへども今日は急き故先此位にてやめ申可くは 長々と御無音に暮しは儀は何卒おゆるし下さる可くは、

○

或人の吾に問ふらく人の世の旅路の果はそもいづこなる

雲水に身を任かすれど我心悲しき思のおやみだになき

二十才のおのこさながら物狂善き歌ならず戀にやぶれて

人知れず思ひこがるゝ昨日今日戀とやつらし只ゆかしくと

さらばくく

太田君

秀雄

4 長田秀雄

伊豆伊東湯川 太田正雄君 親展
(消印八月二十七日) 東京麹町 長田秀雄

どうも失禮手紙も差上ませんで 公用私用甚だ多忙に付き、——まあそんな事云はないでゆるして呉れ給へ僕は十五日の日に沼津を引あげて来たから丁度君の御手紙とかけちがつて歸京の翌日東京へ手紙が着した 福崙君の處へいった時同君は君から手紙がこなひと云ふて額から青筋なんか出すものか少々むつとりとして居た紅葉の弟子は葉の字が着く君は少々近來露伴くさひから或は和尚臭ひから和伴とでも號したらよからう——但し御飯に非ず君安じて可なり 蛇莓籠製本の新、行文の妙、氣の弱い小生等はあつとばかりに聞いた口がふさからず氣絶な仕り候とは偽否方便 さて戲言はぬきとして齊藤氏の番地御教へ申す處小生も燈臺本が少々暗く又昨今は胃病にて外出をゆるされずされど齊藤も今日明日の間には必ず拙宅へ參る可き故其折たぐちに端書にて。後便を待て!!

戀の爲め男の子はなとこ才名を捨てゝこよひの月の見るにえたへぬ

一すじの川の流を白雲の來てうずむると見しは櫻か

片戀のさても我友いたわしや今日韓山に泣きつゝ行きぬ

八月廿六日

玄翁

明治34年(1901)

太
田
兄

明治三十五年

5 小此木龍彦

東京小石川區御殿町百〇九番地 太田政雄兄
明治三十五年一月元日十七日廿八日 東京本郷元町一丁目二番地 小此木青大將

プローシット ノイヤール!!!

愈々歸ルカ御目出度ウ 繪ハガキハイヅレソノ中ニ上ゲマス、實ハ僕ノ様ナ正直者ハ昨日九時ニ學校ヘ出カケ
タサ、スルト突然燒跡ノ眞中ヘ破鐘ノ様ナ聲ヲ立テ、突立タ者ガアル 雪達磨デモアルカト思フト何ニ谷口先
生ヨ、

ソノ演說次ノ如シ

「學校モ直ニ建築スル心算デアツタガ丁度宜イ土地モナク未ダニ敷地ガ定マラナイ(植物園ノ傍モ本當デナイ
ヨ)デ學校ノ立ツ迄三崎町ノ日本法律學校ノ教場ガ四ツアルカラ之レヲ借リテ教授スル、一ツノ教室ニ百五十
人ダカラ今マデノ様ニ監督スル一ハ出來ナイカラ別ニ教師ヲ一人カントクニツケル

一年級ハ皆別科、

遊び時間ハ出席簿ヲツケルニ時間ガカ、ルカラ十分ニ縮メル、デ燒跡マデ遊びニ來ルノダ 辨當ノ時ノ湯吞ニ
モワザ、舊學校マデ來ル御苦勞、然シ法律學校ノ建築ガ充分デナク未ダ立テツ、アル所ガアルカラ學校
ハ十三日カラ始メル」万歳、